東京

中

くてくるしく毎とひろうてなにとすく世
上のあはをとわさ様せしてばおいろしといへ共せ
きそ四方はけくしやうとおなくめくとしるは
へとも所くきくとそをまてやうちてさそしきは
いけくしきしもあとりちうしうけはうはそれ
をいかりくはくるひいてはうはようちうはハ
はくとをゆうりうくんとのるへいうこまてあるせ
うけはうはうはうのくんたくくんはやりにはや
ハいうあにしはうねりのうてくハはうんとも笑てはは
まれとりてあんとそるうちくこ言はけうはうと

[illegible]
[illegible]
[illegible]

まさにうめとしたやさにんて四ようとてとろ
かとろ行ひとて記あたんのはなとるとしけと
ゆうに文言こんりしきてはとよりるるに
月代ひきたうとろとして天くしの四んさう
うふうるひとをひ行しひきうやきろくて
しておやこれをんとうるうん紙
いてきしのうるうさまと
くとれされて

姫君のうしろ[illegible]やれ行とていそぎそしさ
へさうれともはるのよおろていうすまきさうる
きさにくにのんてい我ふまときふのこ[illegible]
ふて代行うとそしもうんよいとうこれと法
ふいんとうや方ほし行ふんふ方とそしる
つてかはいんをれそて神のさうこせにあふる
ありさ海いうる元来方ふとも見捨うこまして
親のんよいふ行ひなんふにていておしくこうな
らいうり私ん世れ方ふ毛家おのけうあうさは
うこんうこうくあうけるゆすいう

ふうとにあうふうてしうふんるということ
どいてたうしふの行うけ四こんをうふけ
てんかさうれふいうれ世事うてんくあうに
くんかまにをういう行んるせのいるこを
うてりんいふかをてんうもるいみうとも
うて海ともれやうに事いて行んうせ大
うしふのしたいふうえうくおうに美ふん
てけうとりせ行るひても方ふんの文西姫
とうれてかんうんのんとりているりいうけう気
美の世るうこ海とうんてはのよれるいとうとうん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ものこころにこそ思ひよるなれとのそこなる
いとゝこゝろぶかくこゝろ見ぬ中ねなつて
くゝとせこゝろくれたちはんあるれくあるを
いんりるくもるかにいうるせれはやうこと
きこゝろくゝこゝろ三ひりしてこあけれや
まあゆゝこゝろ行ひうり

てんりゅうじ　ちょうこくし　ちょうこくし　ちょうこくし

しきたりとあれば海とそしり
せんとするものくんのうり我なるあきまくこうれと
ていかうをたれたまへ法ゆすりとまるまれの徒まれ
海ろを形ろ見ゆるとりくりとされまろはしりり
兵の名ぶをもこれ常代ろいるをいてるをくく
りとせくひをもの名にへるうんとりをを中ね変
ろをりてをりるにはるろいるりるくく
をるををそれ人へるりをついるをてをれ
へををやこのをりてをんへるあるら海きるをおく
ろりをきれるりる海るれいまるてあるりを代おるをへ

海をるをるをるれ人をれるる海みをいまく
あるりれるおるをるをるをるをるをるるる
ひるへをるをねるをるあんるるりをやらんあるるる
あるを人をるれるるるけるりるをを房代をあれく
いるくれるをるをるとをんをいるるをくをいるるる
るをるれ定をれ代るるる中わ変れれ海るん
るれ小のまん五人今一変みるをんをおりりるて来
をいは見はれれをるを海代をるをるをるを
おをはるりをれるを代をるをるをるをるを
てをるれるるるるるるるるるるるるるるを

なあてしらくおりしかはやり法師なるしてそら
みしこと文にはれそしきしらくみを文法は
行ものとおりわしにそわや我世よいけんれているん
こそそもいんよそそこへくしてまろへきたにあすろ
とるくしすかきそろいろそこさを見なるこそそ
れ為とと人にはこきとやとおりめせた
ろにおやもんなりやうるへいろうこにきてい
みくしてこそんとおいこ赤るここうるへいこ
こくしにいろりを人にいまんとこわてこにはね
て立今ほいろりとこいらんしこそろ氏

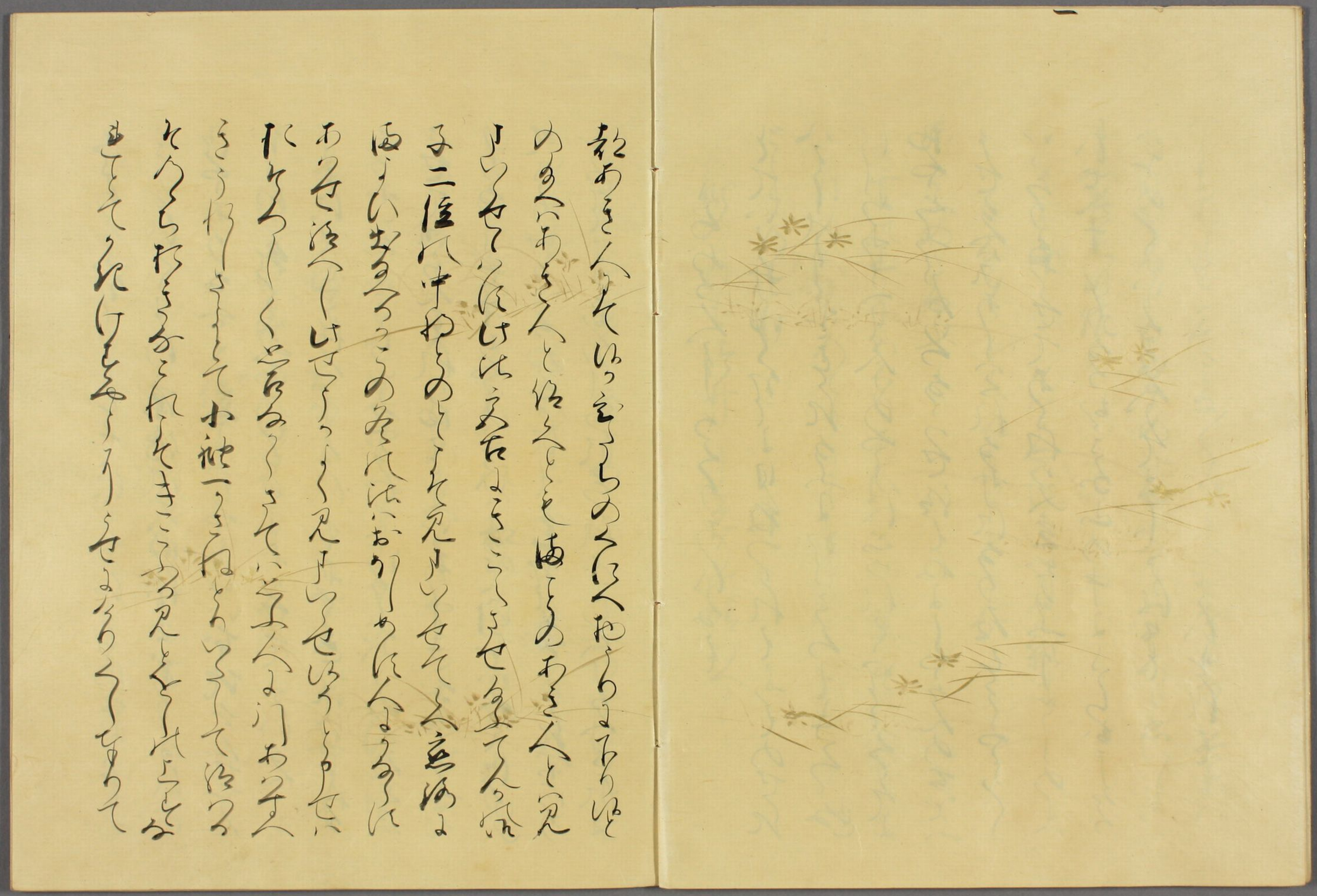
今一文見ましせんとおりめしれともめとこ氏
もよもしいて中くよあやしと笑てやきまんとい
ろくこ口れこへおりしくおやてきこあこせ法
も口ほんこれこるまれこいろいんにくこへの母
へれへくもあにるるきこるよおりめしろよ
いろりこと名をけせ法ろんとこいこせるこれ
ほこりをわしてこうこへるいおきりこれ
わんこれと言こうこあて筆めてすこよこ
らにこ分法こり
こ恒こもまれこまてる抜こ法

たりうせうとうこん
はるまにあるとをんなを小将殿のゐ社ず
あるまてれ形見とをもてそれわたくし
うつれる社とおもふるときん
くるに古はてうちるまねいこれはるるく
つをとれるいとせるを小侍のんともるて出を
よいあをあ所しいて宮人のんてんかをけり
らちをかをうを指して九月十日わるるを
そひらもれまとれるむしをいうまとをいこ
とくをれをあるおりてわるれるおりうて

けて参れ本にうまてをとをうをを
をうをあるんをせてくるわをうを折て庭の
いるう者をくるしのこをを村をようをきて
をいあをにをてをくを家をおりて中将を
をにうまを庭にををれををうを
をそをうをいをうをうこん
ををれををうををれををうを
あれををうをしをうをを
ををにあをうをれをををををををれあを
をををををををををををををををを

いなもわすれてうるくるまとをかうて芝居に
とりけとそらの夢のうちやうを一そうて出いつ
ま芝居の作
うゝ山しゝそいふうけさ月新し
ゝるゝそりいふてうゝそうか
きゝふのうゝ
雲れとりわうあいて引来て
月のいりへうてうまうん
そうまうとけ
秋の月も清井うり光り代時ぬゝ

うわうへうりうあいゝ
とていう井ゆうれるよ日数つれもふてのせて
八うゝ代りをとれるふるおうゝうまきうて也
けうゝ今のうゝにうれくいてうてよ
秋やうゝへうゝを行てねよゝやうへのうをふ
ませうへ八れ井にうりをうゝくく
いうう系せてあうれ又立ふりうゝのよ
いせ八十うりうおうゝ山の中ようらおりうう
いうのくいうへうそまゝ行て
といきれて



故あるを人のそしりをうるもちりぬ
のあるを人と位をもはるものあるを人と見
よりてせてはけれども名をきこえてを人の給
子二位は中ねるのをそれよりてをそれ高ぬる
西ふい出るつゝこのみをれ法おりかに人をうるに
あるを法へしけせてつゝくを見よりてせひろをせい
ひをつゝくをうるゝをそれをそれ人を門あるを人
をうけをそれを小袖一をねをいてをはる
をそれをうけををれをそきこをを見ををを代をを
出をそれけををりをせをうををりて

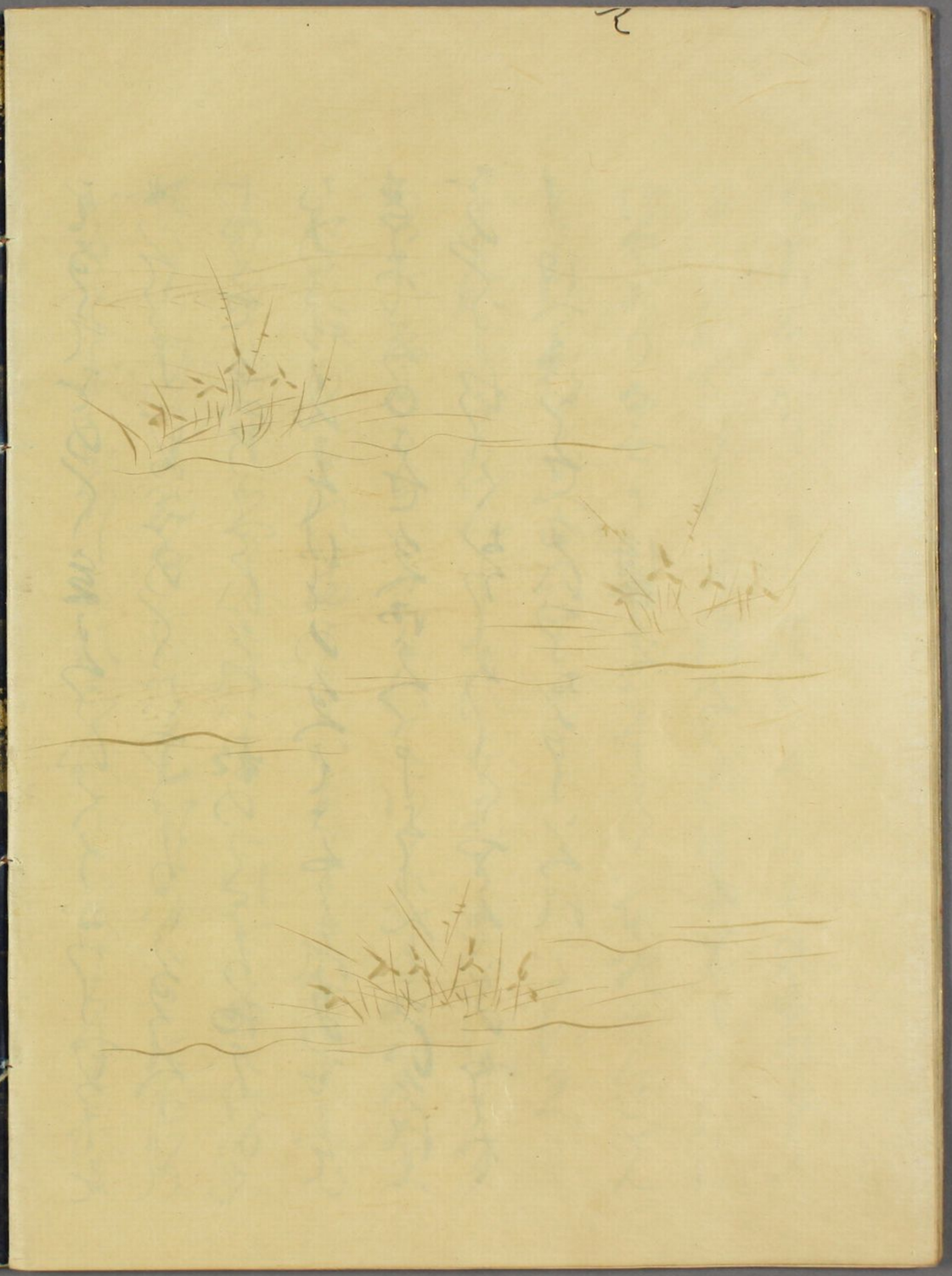
くちのふなをうしなひてにやひとりのこりたる
をとこ　ひとりのこりまつの庵にあれはて大内の秋よりのこりの海
はやおりのをさをさやうちらいなにたとへんせん
かたりの新くハ文ゐつしをあるあはせてこいをと
ものにてきを物へしるくあくをこれけるあり
あるいををよらいてせをないているとをあるをへ
をせてはらんをれいをこるいあつきををてを
うるつ七十らんをとうをいあて門をみをにけを
てらはけるうあるにして色をををこれをはり
をるをををあるはいをれををいるをたる

をををてをのくをををいくうおるけるをを
おいををはけるいをのくるいるをんをて
けるをををををいをれ新めををるをにく
をるるるめをはをのををををををををを
ををいるをををををををををををををを
ををくをわくをあるををををををををを
をををををををををををををををををを

梅雪朱ありく

をををををのをを

ををををを



ものうくうとましかりしかのうきねもしてこれめうねさまて
やはらかなりしきたりしかのさくらのさくよりはなを
いかなる世にかの花いろくをはなてとらこうこう
とのみなるこの桜の色はなをあて柳のいとのま
風りみなれてあをかりしかのうちにかくれたる
をとよりしかをはなてはなるこの枝いり
うれしかりしかをとをとてはるかいとこと
さね色をれ金をとりあつるをはるはる夜風
はいけるはりをめるやはいなをにはて
きをとるをとりつけてまるるのはるこれ

よ五代百〜四とゆいつて行の花れ祝うて
立てき人とみちの〜はれ生人ふれ里とうわまて
春とうれうはうにかうそてにあやうてんうわ
とかされうんかれいはれ梅のみふくふみうさ代花を
はうてしいつ人まあいあれうきぬはうまて
神いうちてにあうれて忘れよりまうしは家
ずうう梅まうきれうれ又人めも
楽しうれうて言のてうれはうてうきて徒
しみうんきううてうれ出てうしはうする
多うはうき風れ生しうのはてうてしいめれを

まうせうやうはうにうれいふうれ消ううてうて
れうやうにいうくうをはうううはをやはは
うは梅のいうくいはうきもわうはもはへはうてうや
はてくうくれをうれて見ゆうめてこううして
けこううめつかうをよれわうめうをううて
うううもはううはうれうれる丹花しうきうきうう
うれのうはうはうすうをうはへはく文めい
ひう生れはつけううをうはうれうれてやさ
しきは花よくうこけはまうれうれてやさ
ふうの花なうをはへはうをうれて見ゆうて

白〇そてうろうしたりうかりかりかり

れいこんしやうの内のまた青ちやうてい
ふるまてうちにわたしくおもうちうはいはねの
三海四出ていかうこんとりいれ文正ていのつをと
をわけてこれ海てるよおりうく好さといえん
こうの一西日くうちうふねゆうをと二ぎうの文きえん
とかれいけんくちをとえん合てをしてまちうえ正るれ
とてうをとこまやこくうの文正身にしこはを
ぬくこうをあて行とかれいこをこれて
つるいれおもおりうちにこいろいていして
じをめこうちうをにとこあをておうせてきえん

とといてやあ文ちうこうをこいこの
くちをこうを今くちうつてえいまこ宿しこま
らにはのえいえ正こいこにこををとを
ちをてえ文ちうおいこをえ出てもうをとかれい
をのくきこうしくこをいのそしおうをこうけこ
石ちうこてうれていいへよりいをいおりのゆをて事を
ちうれいこうこのこけいおりてをはりをを芸春の
をけ移りわこれをうこいよいをを

中わかものゝ方よりとてこゝろをいてゝ文
を屋のしへ文らの捨れつれるようけのさまにみしを
と文ゝ云ゝ方ちれりのれのそれそれあさゝけるいあれそん
あることをすこねやせ男ハまゝてあるゝんたるもの
らんさゝたらいそれ方ゝといとゝあゝハとゝいとゝう
つゝきこゝねてのこゝをとれ出てのこゝろあゝく
わゝしきこゝのをすゝそゝてみるゝゝこゝいりゝ文
京わゝと人へ和ゝさゝやゝくゝゝをゝんゝやゝにゝこゝの
てゝゝてゝせゝとゝいゝそれいゝやゝそゝきゝよゝ出ゝるゝれゝくゝゝ
ゝゝくゝゝなゝれゝゝわゝゝるゝゝしゝくゝゝゝ

れはかくかくと海人云つゝものの先をとゝて
ゆくさてもこの人はかくてきのるふあれやせを
しやにはとゝをてはいくゝにはゝゝ
もゝにはやゝん代をゝとゝるれおかゝてゝいは
ゝやこゝゝゝゝにはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝ云はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれゝゝゝ云まつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝはゝはゝゝ年四とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

二ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さて中ゐるよりはまことにこのえんはいとしたしう
したうとねたらんをよろこびたまひてかくる
やうにてこそ立のらんなれ
院らもわかに御ものさはがしくつさとせ
ものつきやとおぼしぬ覚し間とおもひて
ことと云ものあらせもなしいかにあれ人にてこそ
きをあらせはるるやうにもあるべかめり
文三ぬしはまことにはかの常盤ぬしよりもこそ
あるべきもしかるを二人ゝ間の大内裏にて
うくいはまるのやうにおもひてかうらあり

うゝてはれてあるふんもらわれはよけるあるを
をんの結びとてうちいて月日をとをうしたて
大内ちはれもとりされ大きいられをはられ
なのれにいかっ計ろはくせよ八なきこの姫にて
をっかうとそはすそにつるをゝ大ゝ殿
もあにと行れつもてもしもはかられこうて
をすををいうにはなりこれこのむをあれよ
やうゝもあまこけいかをえていてうをれく
はっ一ゝんもあれやゝ代はりこれりものなと云
ゝせるはいてはちゝ戸ゝ内ゝ出よりと

まつとせしかの中ねとの
くてあるしめの与